

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

セクレタリー

配給/ギャガ・コミュニケーションズGシネマグループ

2003 (平成15) 年7月23日鑑賞

<ヘラルド試写室>

Data

監督: スティーブン・シャインバーグ

出演: マギー・ギレンホール/ジェームズ・スペイダー/ジェレミー・デイヴィス/レスリー・アン・ウォーレン/ステファン・マクハティ

👁️👁️ みどころ

セクレタリーとは秘書のこと。自傷癖のある内気な女の子が、勇気を出してやっと「秘書」の仕事に就いたのは43歳の独身エリート弁護士の事務所。「主従関係」にある2人の間にはいつしか愛情が……。これだけならよくあるパターンだが、本作品における味付けがすごい。ヘタをすると変態(?)になりそうな「愛情表現」を芸達者な2人の主人公が見事に演じている。男性の弁護士先生には特におすすめ……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<法律事務所の弁護士と女秘書>

セクレタリーとは、もちろん英語で秘書のこと。この映画では、個人で法律事務所を経営するアメリカの弁護士が雇った女性秘書が主人公だ。そして、パンフレットによると、「弁護士と新人秘書との奇妙な主従関係が、やがて一途な純愛に!? アメリカ女性に熱狂的に支持されたクセになるラブストーリー。」とある。これはヒトごとではない。一体どんな映画なのか? これは絶対観ておかなければ……。しかもこの映画は、2002年1月、サンダンス国際映画祭で特別審査員賞を受賞した他、主役の女秘書を演じたマギー・ギレンホールは、ゴールデン・グローブ賞で最優秀主演女優賞にノミネートされた他、ボストン映画評論家協会賞で最優秀主演女優賞、シカゴ映画評論家協会賞で新人演技賞、と各賞を総なめしている。

てなわけで、早速平日の真っ昼間から、業界関係者御招待の試写室での映画鑑賞だ。

<ヒロインは自傷癖のある変なオンナ>

まず、冒頭のシーンに度肝を抜かれる。そして同時に、一方の主人公と同じ男性の弁護

士として何となく気恥ずかしさを感じてくる。

そのシーンとは、今や秘書としての自信をつけた主人公リー・ホロウェイ（マギー・ギレンホール）が、マゾッ気たっぷりのスタイル（その姿は想像におまかせ）で、楽しげに法律事務所で「お仕事」をしているのだ。このびっくりする冒頭シーンが終わると、今度は画面は一転して、その半年前にさかのぼる。

主人公のリーは、男性経験も就職経験もゼロという内向的な25歳の女性。しかも父親の母親に対する暴力行動などを見せられたリーは、その心の痛みを自らの肉体に刻みつけることによって癒すという「自傷癖」を持っていた。従って、彼女の足や腕は自傷行為によるキズだらけ。母親は、キッチン内の包丁類を一箇所にまとめ、カギをかけておかなければならない始末だ。

<面接にのぞむリー>

そんなリーも、精神病院の中での規則正しい生活の中で、やっと少し回復し、今日はお姉さんの結婚式。退院を許されたリーは、母親の迎えのもとに久しぶりに我が家に帰ってきた。そして家族との生活の中で、再び自傷癖と闘いながら、社会復帰を目指してコミュニティ・カレッジに通い、タイプの資格を取った。リーも一生懸命だ。そんなリーが、たまたま見つけたのが、「秘書求ム！従順なタイピスト大歓迎」という、ミスターグレイが個人で経営する法律事務所の新聞広告だった。

母親の運転する車で、この法律事務所に来てきたリーは、初めて、就職のための面接試験にチャレンジだ。

<43歳の独身エリート弁護士もちょっとヘン(?)>

リーを面接したエリート弁護士は、エドワード・グレイ（ジェームズ・スペイダー）。結構知的でハンサム。そのうえ体を鍛えることが趣味。腹筋、懸垂、ルームランナーなどその運動にとり組む真面目な姿勢は、非常に前向きで、私と全く同じだが、何となくスティックの度合いが強すぎる感じがある。そして、変な趣味もある。蘭の栽培はまあいいとしても、ちょっと暗い。ましてや、今までやめた秘書の「ポラロイド写真集」というのは、ちょっと悪趣味。また彼には離婚歴もある。失礼ながら当然か・・・？

面接のためにオフィスに入ったリーは、ダンボールに荷物を入れて退職していく女秘書と入れ違い。そして、面接の際のグレイからの、①妊娠中か？②妊娠の予定は？との質問は、今の日本の基準でも、ましてやアメリカスタンダードでは、それ自体セクハラ行為そのものだ。グレイ弁護士はこんなヘンな弁護士・・・。

<グレイの変態性>

そんなヘンな弁護士グレイの「変態性」が発揮されるのは次の2つの場面。

第1は、秘書稼業を続ける中で少しずつ自信を取りもどし、同じく精神病院に入院した経験を持つ幼なじみのピーター（ジェレミー・デイヴィス）と仲良くなったリーが、初めてピーターとキスを交わす姿を偶然見てしまったグレイの反応だ。その反応は嫉妬心に基づくもので、きわめてアブノーマルな反応だ。すなわち、このキスを目撃したグレイは、翌日からリーの打つタイプに赤ペンを入れて嚴重なチェックを開始しはじめたのだ。もっとも、これは、グレイのリーへの愛情表現の1つなのだから、いやはや・・・。

そして第2は、タイプミスをしたリーに対する「秘書教育」として、何とデスクに両手をつかせての「お尻叩き」の「お仕置き」だ。こんな秘書教育がまかり通ったら、そりゃエライこと。ところが・・・。何とリーは、このグレイによる「お尻叩き」の「お仕置き」にモーレツな快感を感じてしまい、以降、毎日グレイによる愛の「お尻叩き」を待ち焦がれるようになってしまったのだ。へんな話・・・。「法律事務所」でくり広げられる、こんな何とも異様な、想像を絶するシーンには本当にビックリ。

<こんな関係はいつまで続くのか>

前述のように、何とリーはグレイによる愛の「お尻叩き」を意外にも抵抗なく受け入れた挙句、それを待ち焦がれるようになった。そうすると、2人にとってのこの「愛の行為」はもはや「非日常的」な行為ではなく、「日常的」な行為になっていった。そんな中で自信をつけたリーの秘書としての「働き」ぶりが、冒頭シーンのマゾ的な衣装での「お仕事」だったわけだ。

しかしこんな2人の関係にもひびが・・・。それはアルコール依存症の父親が入院したことにショックを受けたリーが、グレイの家を訪れ、真剣に「精神的」な愛の告白をしようとしたことがきっかけだった。2人の間に精神的な愛が介在してくることを恐れたグレイは、その翌日から完全にリーをシャットアウト。ビジネスライク以外の接触を断ち切ったのだ。

しかし逃げられると、追いかけてくなるもの。それが恋・・・。逃げようとするグレイをあの手この手でさかんに挑発するリー。ある日リーは、ミミズ入りの手紙をグレイに送った。すると何とグレイはこれに反応。ある日2人はオフィスの中で・・・。このシーンを描写することはちょっとこの映画評論ではムリ。スクリーンでのお楽しみに・・・。

<失意のリーは同級生のピーターと・・・>

エドワード・グレイは弁護士だが、人並みに性的な欲望を持っているのも当然。しかしリーとの変態的なセックス(?)に嫌悪感を覚えたグレイは、さすがエリート弁護士。「大人の分別」をもってリーを解雇。「ゲット・アウェイ」とくり返した。

そんなリーをタイミングよく受けとめてくれたのは幼なじみの同級生のピーター。リーは深く考えないまま、このピーターの求愛を何となく受け入れた。そして今日はそのリー

とピーターとの晴れの結婚式だ。

<『卒業』まがいの意外なてん末が・・・>

ウェディングドレスを着け、晴れの結婚式にのぞもうとしていたリーは、そこでハタと気がついた。「ピーターは私を満足させてくれる男ではない！私が本当に愛しているのはエドワード・グレイだ！」と。そこでリーがとった行動は……。あのダスティン・ホフマンとキャサリン・ロスが主演した有名な『卒業』（1967年）でのラストシーンを彷彿とさせるもの。リーはウェディングドレス姿で逃走だ。そしてリーはウェディングドレスのままグレイの事務所へ駆け込み、『I Love You』の連発。はて、エリート弁護士グレイは困った。そこでとりあえずグレイが命令した言葉は……。これまた変態的。二人だけにわかる愛のポーズ、すなわち、「机に両手をつけ！」というもの。しかも「俺がいいと言うまでそのままじっとしておけ！」というものだった。

さあこれからどうなるのか・・・？これ以上解説するのは野暮というもの。ウェディングドレスのままじっとデスクに両手をついて座るリーは、何も飲まず何も食べないまま……。そして汚い話だが、おシッコもウェディングドレスにたれ流しのまま……。こんな愛もあるのか！と最後には大感激！

<秘書役のマギー・ギレンホールと弁護士役のジェームズ・スペイダーのすばらしい演技>

自傷癖のある精神的疾患をもったオドオドした女の子が、いつの間にかミニスカートをはいたさっそうとした女秘書に成長。しかし、その成長過程はあまり普通ではなく、かなりアブノーマル。雇い主の弁護士による「お尻叩き」の「お仕置き」に快感を覚えたことに自信をつけ、性的な欲望だけではなく、あらゆる面で自分を取り戻していく。そんな微妙で難しい役柄を見事に演じているのが、1977年生まれのマギー・ギレンホール。彼女は近時公開された『コンフェッション』（03年）でも、チョイ役ながら、主人公チャック・パリスの同僚という面白い役を演じている。

他方、エリートながら内気で屈折したヘンな弁護士役を演じたのは、『セックスと嘘とビデオテープ』（89年）でカンヌ映画祭の主演男優賞を受賞したジェームズ・スペイダー。自分の欲望や性癖を率直に表現することができないまま、女秘書との、セックスと愛情と主従関係に悩み、これまた難しい役どころを、見事に演じている。

<総評>

この映画のテーマはセックス、愛そして権力。しかも法律事務所を舞台としたその描き方にはかなりキワどいものがある。一方は、シャイな43歳のエリート男性弁護士、他方は自傷癖があり、病院に入った経験をもつシャイな25歳の女秘書。この2人の想像もつかないような関係は、かなり興味深い。

カネ目当て、地位目当てで「弁護士の妻希望」という話は世上よくある話だし、明石家さんまが司会するテレビの人気番組「恋のから騒ぎ」でも、時々そのような話が取り上げられている。しかし、この映画での2人の関係は全くそういうものではない。ちょっと言いにくいけど、純粋に、何らかの性的な共通性(?)に基づくものだ。

結構マンガ的なシーンもあるし、ちょっと悪趣味そして変態的なシーンにはドキリとさせられたりもするが、そんな変な方向になりそうなところをカバーするのが2人の主人公の見事な演技。女の自慰行為や男のマスターベーション行為まで堂々とスクリーン上で見せ(?)ながら、決して映画のレベルを落とさず、世にも珍しい男女の関係と主従の関係を描き切ったこの作品は、さすがサンダンス国際映画祭で特別審査員賞を受賞しただけのことはある。もっとも、一步間違えば、変態そのもの、セクハラそのものの映画になることは間違いなく、その微妙な境界線をキープすることは大切だ。

あらゆる意味において、個人経営をしているすべての法律事務所の「男性」弁護士に超オススメの作品だ。

2003 (平成15) 年7月23日記